



TITLE:

日本文化に見た夢お雇い外国人建築家コンドル先生重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」：平成21年度京都大学図書館機構公開企画展

AUTHOR(S):

CITATION:

日本文化に見た夢お雇い外国人建築家コンドル先生重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」：平成21年度京都大学図書館機構公開企画展. 2009

ISSUE DATE:

2009-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/91248>

RIGHT:

平成21年度京都大学図書館機構公開企画展
日本文化に見た夢
お雇い外国人建築家コンドル先生
重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」

2009年12月2日(水)－24日(木)

主催：京都大学図書館機構

共催：京都大学工学研究科・京都大学総合博物館

Contents

総説	1
----	---

コンドル建築図面	2
----------	---

I 東洋と西洋のはざままで	2
---------------	---

II 日本文化の受容	5
------------	---

III 邸宅建築家としての活動	6
-----------------	---

IV 日本文化に見た夢	8
-------------	---

V コンドル建築図面の美	9
--------------	---

コンドル建築図面のデジタル化	12
----------------	----

I デジタル修復	14
----------	----

II クローズアップ	15
------------	----

III コンドルのデザインの世界	16
------------------	----

Josiah Conder 略歴	18
------------------	----

日本文化に見た夢 お雇い外国人建築家コンドル先生

——重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」

明治10年（1877）、イギリスから一人の若い建築家、ジョサイア・コンドル（1852–1920）が、お雇い外国人として明治政府に招かれ、来日しました。コンドルは、日本に本格的な西洋建築を建てたいという明治政府の意向のもと、工部大学校造家学科（現・東京大学工学部建築学科）で教鞭をとりつつ、鹿鳴館や上野博物館を始めいくつもの国家的プロジェクトの設計に携わりました。

その後、明治21年（1888）に民間建築事務所を開設すると、ブルジョアジーの邸宅建築家として才能を花咲かせ、岩崎久弥茅町本邸（重要文化財）や綱町三井倶楽部など優れた住宅作品を数多く残しています。

コンドルは、西洋の様式を導入するばかりではなく、日本とヨーロッパの中間点であるサラセン様式を取り入れたり、和と洋の折衷を試みたりしています。それは、日本の風土や歴史・文化にふさわしい建築様式を求めてのことでした。

彼がこうした造形志向を抱いた背景には、日本の文化を積極的に学ぼうという姿勢があったからだと考えられます。コンドルは、設計のかたわら日本画・日本舞踊・歌舞伎・花道・日本庭園・日本の服装などの日本趣味に親しみ、また研究を進めました。それは日本画家河鍋暁斎に師事して、「暁英」と号し、Paintings and studies by Kawanabé Kyōsai（邦題『河鍋暁斎』）という本を出版するほどでした。彼が発表した論文や著作は、当時の欧米人による日本研究の中では最高水準のもので、ヨーロッパにおける日本研究に大きな影響を与えました。

京都大学はコンドルの建築図面を多数所蔵しており、平成18年（2006）には重要文化財の指定を受けました。丁寧に描き込まれ彩色された図面は歴史的、かつ美術的価値を備えています。本展覧会では、「日本近代建築の父」と呼ばれるジョサイア・コンドルの遺した美しい建築図面から、彼が日本文化に見た夢の軌跡をたどります。

コンドル建築図面

I 東洋と西洋のはざまで

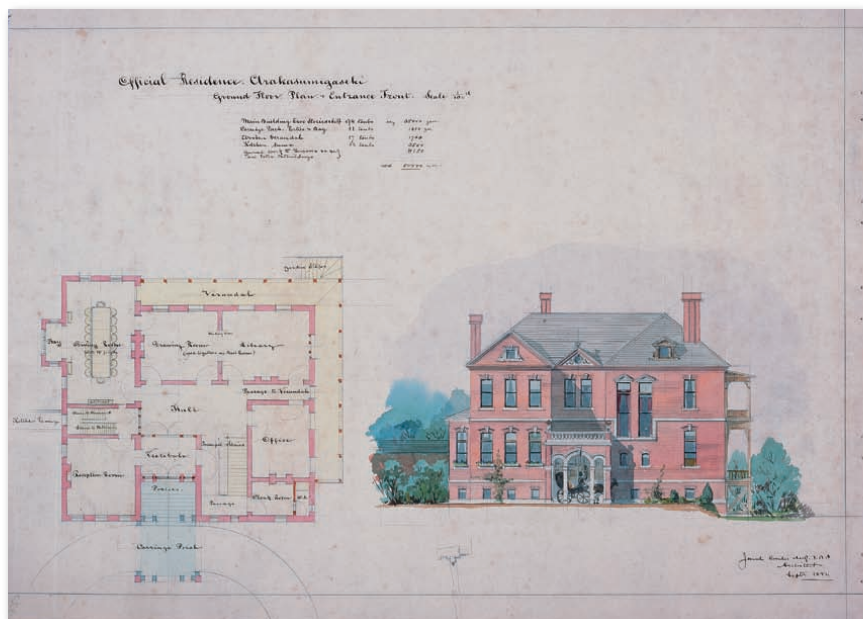
ジョサイア・コンドルは、明治10年(1877)に来日し、工部大学校で教育と設計活動を始めます。

日本で建築家としての人生を歩んで行こうと決めたコンドルの心中はどのようなものだったのでしょうか。

コンドルは、初期の作品において正統な西洋の様式に則した建築を造る一方、日本とヨーロッパの中間に位置するサラセン様式を取り入れた建物を設計しています。これらの作品からは、これから日本で設計活動を行っていこうというコンドルの意気込みとどうすれば日本の風土にあった建築を創り出せるかを試行錯誤した跡がうかがえます。

一方、明治後期になると、コンドルは、正統な様式建築を多く設計するようになります。それは、依頼主の意向でもあります。コンドル自身の心境の変化を表したものでもあったと考えられます。時間がたち、教え子たちが活躍するようになると、第一線での活躍は、彼らが取って代わるところとなります。そのなかで、自身の進むべき道に少なからず悩んでいたと考えるのは、不自然ではありません。力強さの中に、どこか儚げなものが見え隠れするこれらの作品からは、彼の揺れ動く心情が感じられます。

しかし、コンドルは、このような状況下でも、ハーフティンバー（木骨様式）というヨーロッパの民家に見られる形式を取り入れるなどの工夫を凝らした作品を発表していきます。これらの作品からは、コンドルが邸宅建築で発揮することとなる、華麗で洗練された表現、上品かつ軽やかな雰囲気萌芽が見て取れます。



I-1-1 Official Residence, Urakusumigaseki Ground Floor Plan & Entrance Front. (裏霞ヶ関官邸)
平面、立面/ワットマン紙/鉛筆/彩色/49.0×68.5

I-1 裏霞ヶ関官邸

明治17年(1884)設計

裏霞ヶ関官邸は、時期や規模から外務次官の官邸である可能性が高い作品である。しかし、写真などは残っておらず、計画に終わったのか、実施されたのかははっきりしない。

二階建ての建物で、外壁には赤煉瓦が用いられ、玄関や窓に設けられた装飾が上品な印象を与える。

水彩の淡い色使いはコンドルの得意とした手法であり、平面・立面図(I-1-1)でも、その技術が十分に発揮されている。コンドルの自署が図面右下に記されている。

I-2 基督教青年会館

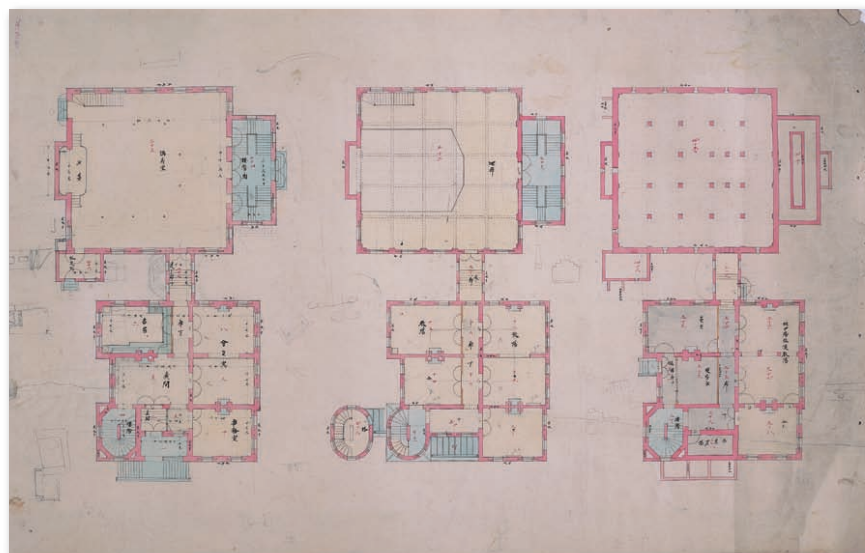
明治25年(1892)設計

明治27年(1894)竣工

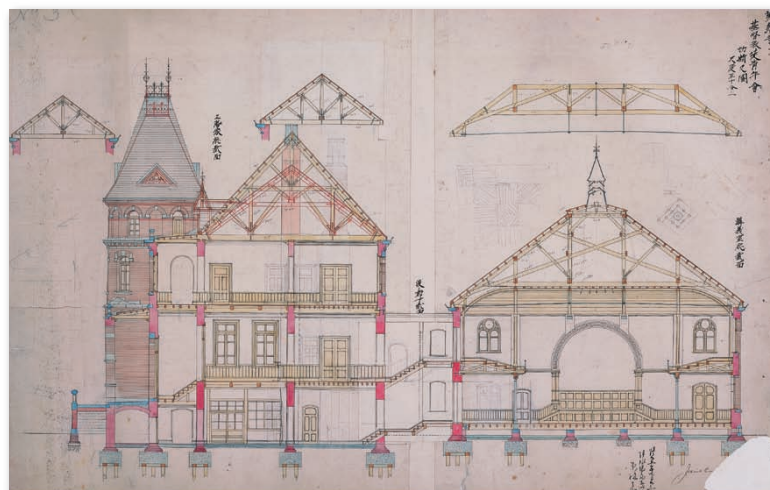
基督教青年会館は、明治16年(1883)に設立された東京YMCAの会館として東京・神田に建設された。

三階建ての本館と二階吹抜けの大講堂により構成されたロマネスク風の建物で、外壁には赤煉瓦が用いられる。尖塔や入り口に設けられた大きな半円アーチが特徴的である。

コンドルが設計を始めた時期は不明であるが、断面・小屋組図(I-2-2)には明治25年(1892)7月23日の日付が書き込まれており、平面図(I-2-1)とあわせて工事の着工に先立って用意された契約用の図面であると考えられる。平面図に記された寸法単位は尺寸である。



I-2-1 基督教青年会館設計図
平面(1、2、地階)/ワットマン紙/墨入/彩色/60.5×95.4



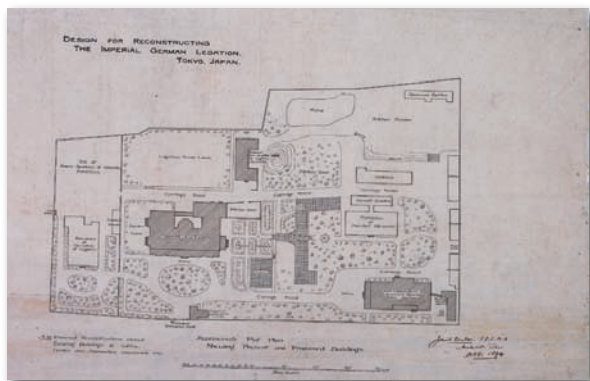
I-2-2 第参号 基督教徒青年会切断之図
断面、小屋組/ワットマン紙/墨入/彩色/61.4×97.6

I-3 独逸大使館

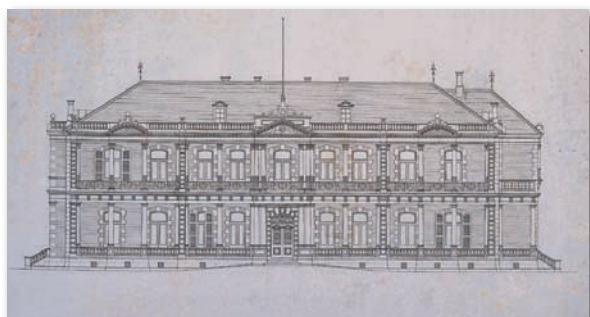
明治27年（1894）設計 明治30年（1897）頃竣工

明治27年（1894）に地震によって前身建物が被災したため、コンドルの設計により明治30年（1897）に再建された。本館は煉瓦造総二階建て、正面全体に二層の大規模なベランダを設けた重厚な建物である。コンドルは、本館のほかに、公使館使用人棟、書記官及び通訳官官邸、同使用人棟、門衛所の設計も手がけている。なお、本建物は、第二次世界大戦中の爆撃によって破壊され、現在は同敷地に国立国会図書館が建っている。

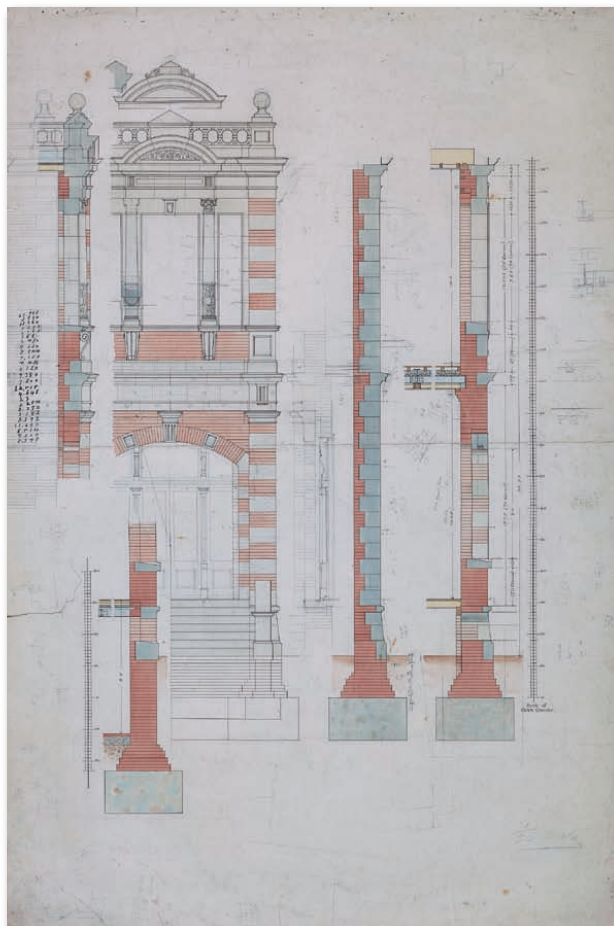
配置図（I-3-1）と立面図（I-3-2）は、絹の布（クロス紙）に描かれている。配置図の寸法単位はフィートである。一部彩色が施された矩形・立面詳細図（I-3-3）は、細部に至るまで丁寧に描写されている。



I-3-1 Design for Reconstructing The Imperial German Legation. Tokyo, Japan. (独逸大使館本館)
配置／クロス紙／墨入／45.8×71.0



I-3-2 独逸大使館本館設計図
立面（南面）／クロス紙／墨入／48.9×91.1



I-3-3 独逸大使館本館設計図
矩計／立面詳細（部分）／ワットマン紙／墨入／一部鉛筆／彩色／100.1×66.8

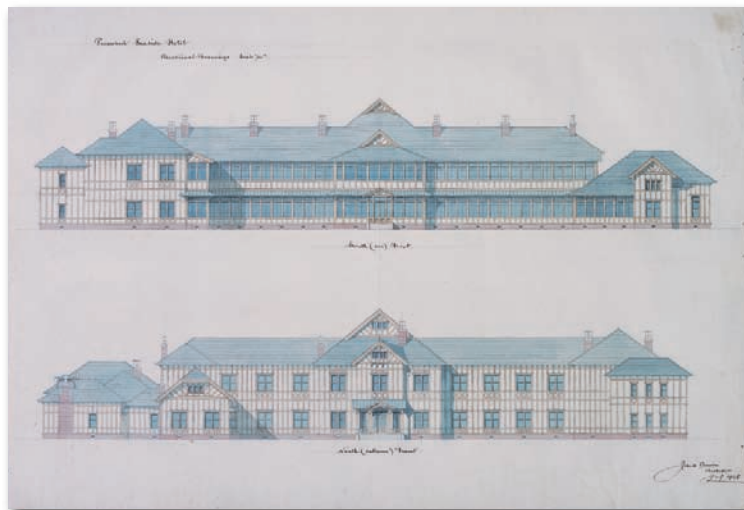
I-4 鎌倉海浜院ホテル

明治39年（1906）設計

鎌倉海浜院ホテルは、鎌倉由比ヶ浜海岸にあった西洋式のホテルである。第二次世界大戦後、占領軍の失火により焼失し、現存しない。

コンドルは、木造二階建て、壁に木の柱や梁を見せるハーフティンバーという形式で新築案を計画した。ハーフティンバーの採用は、当時イギリスで流行していたピクチャレスクの影響だと考えられている。立面図（I-4-1）に記された年号「Jul. 1906」とコンドルの自署から、明治39年（1906）6月ごろには設計を進めていたことがわかる。

なお、新築の計画は設計変更を繰り返した後に中止され、実際には部分的な増築が行われるにとどまった。



I-4-1 Proposed Sea-side Hotel Elevational Drawings (鎌倉海浜院ホテル)
立面（南面、北面）／ワットマン紙／鉛筆／彩色／67.5×97.9

II 日本文化の受容

コンドルは、設計のかたわら、日本画・日本舞踊・歌舞伎・花道・日本庭園・日本の服装などの日本趣味に関心を示し、研究を進めました。コンドルが発表した論文や著作は、ヨーロッパでの日本芸術の理解に大きな影響を与えました。それは、コンドルが師事した河鍋暁斎の評価が欧米で抜きんできていることなどからもうかがい知ることができます。

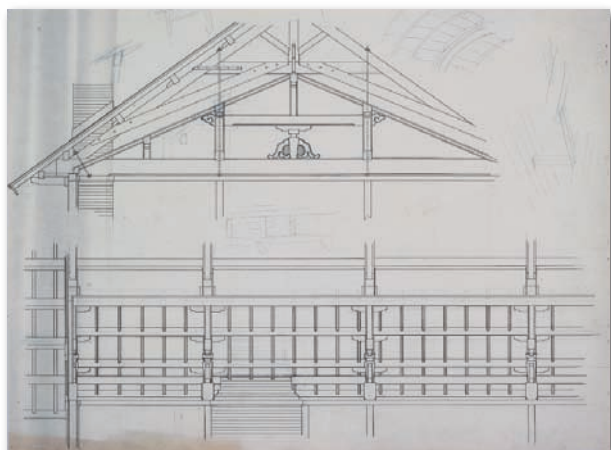
コンドルは、こうした研究に取り組むとともに、和風意匠を取り入れた作品をいくつか手掛けています。それらは、どこか垢抜けない印象を与えながらも、勢いと力強さが感じられます。コンドルにとって作品に日本文化を取り入れることは新たな試みであり、それに対する期待と喜びが図面の表現にも表れているように感じられます。

II-1 唯一館 明治26年(1893)設計 明治27年(1894)頃竣工

唯一館は、ユニテリアン教の神学校及び布教活動の本部として建設された木造二階建ての建物であり、のちに日本労働総同盟の労働会館として昭和初期まで使用されていた。

平面構成や暖炉などの室内意匠、構造や仕上げ材などは西洋建築の技術を用いている。その一方で、木鼻付虹梁や笈形(小屋組詳細図(II-1-1))、木連格子や懸魚を施すほか、屋根・軒に反りを持たせ、煙突に石灯籠の形を用いるなど、日本の伝統的な形式を志向した技法・外観を導入している点が特徴的である。

立面図(II-1-3、II-1-4)に記された年号「Feb. 1893」とコンドルの自署から、これらの図面は竣工前年に作成された実施図面に近いものであった可能性が高い。



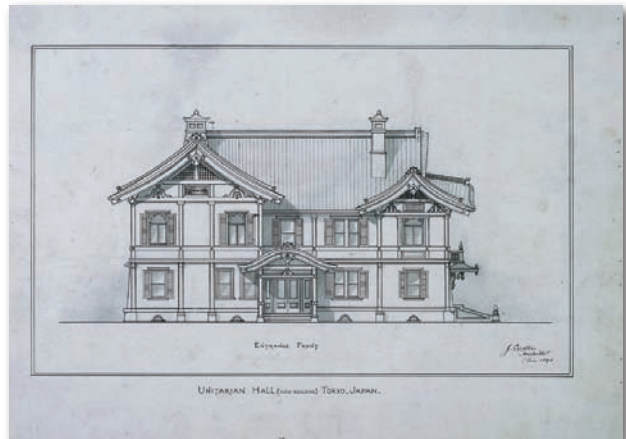
II-1-1 唯一館設計図
小屋組詳細/ワットマン紙/墨入/46.7×63.7



II-1-2 Unitarian Hall (now building) Tokyo, Japan. General View (唯一館)
透視図/ワットマン紙/墨入/32.7×45.4



II-1-3 Unitarian Hall (now building) Tokyo, Japan. Side Elevation (唯一館)
立面(側面)/ワットマン紙/墨入/32.6×45.4



II-1-4 Unitarian Hall (now building) Tokyo, Japan. Entrance Front (唯一館)
立面(正面)/ワットマン紙/墨入/32.5×45.3

Ⅲ 邸宅建築家としての活動

コンドルは、明治21年（1888）に工部大学校教授としての仕事を終え、邸宅建築家としての道を歩み始めます。明治27年（1894）の丸の内三菱一号館の設計を契機に、三菱財閥の創業家である岩崎家をはじめ、上流階級の人物とのつながりが強まり、多くの大邸宅を設計することになりました。コンドルの本領は、ここから発揮されるといっても過言ではないでしょう。また、この時期、コンドルはイギリスに帰らず日本に残ることを決意します。それは、イギリス建築界の主流の変化や、岩崎家のようなパトロンの存在が影響していると言われています。

邸宅建築家として活躍を始めたコンドルは、洗練された様式建築を中心に設計を行います。邸宅建築家としての初期の時期には、ハーフティンバー、ベランダを用いた住宅を多数設計しており、コンドルがどのようなデザインを好んだのかを知ることができます。

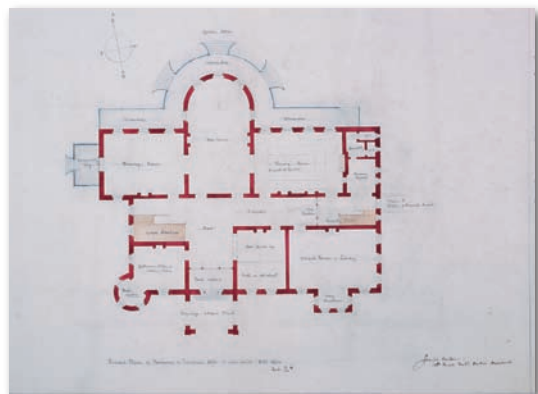
Ⅲ-1 欧風住宅 年代不明

現存する2枚の設計図面だけが、その姿を伝える住宅作品である。建坪約250坪、煉瓦造二階建ての比較的大規模な住宅であり、南側の半円形の舞踏室や二層の鉄骨ベランダが特徴的である。

依頼主や使用目的、コンドルに設計を依頼した経緯は明らかでなく、実際に建設されたかどうか不明である。

図面の右下に記されるコンドルの自署にM.R.I.B.A（英国王立建築家協会準会員）とあることから、英国王立建築家協会の正会員になる明治17年（1884）11月以前の設計であることがわかる。

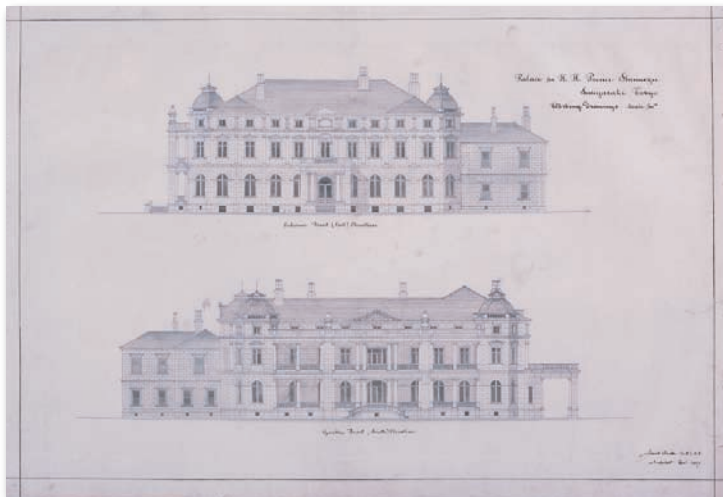
図面には水彩による彩色が施されている。自署や表題を除き、図面への書き込みがほとんどないため、最終案に近い図面であると考えられる。



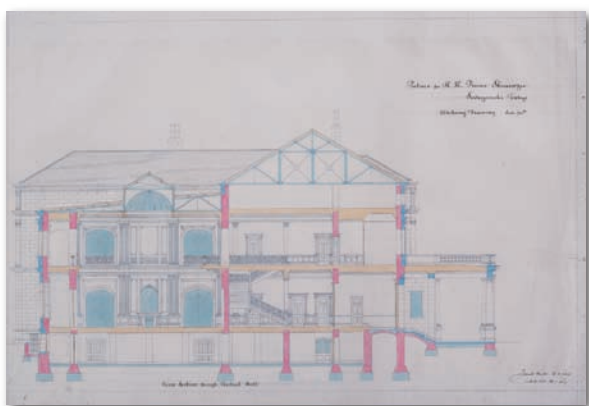
Ⅲ-1-1 Ground Plan of Residence in European Style to cover about 250 tsubo (欧風住宅)
1階平面／ワットマン紙／鉛筆／彩色／48.5×68.3



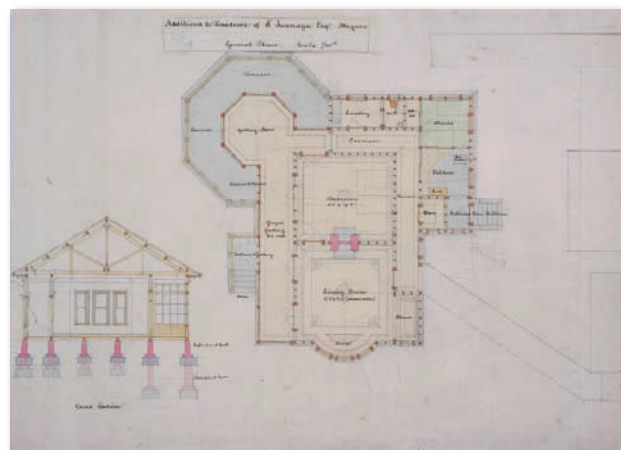
Ⅲ-1-2 Elevations of Plan B (250 tsubo) (欧風住宅)
立面（背面、正面）／ワットマン紙／鉛筆／彩色／62.2×46.3



Ⅲ-2-1 Palace for H.H. Prince Shimazu Sodegasaki. Tokyo Working Drawings (島津邸本館)
立面（東面、南面）／ワットマン紙／鉛筆／彩色／67.8×99.0



Ⅲ-2-2 Palace for H.H. Prince Shimazu Sodegasaki. Tokyo Working Drawings (島津邸本館)
断面／ワットマン紙／鉛筆／彩色／67.7×99.1



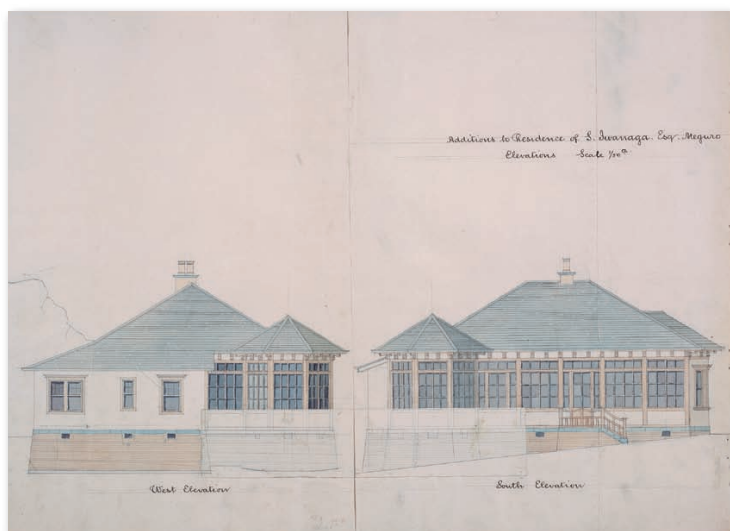
Ⅲ-3-1 Additions to Residence of S. Iwanaga Esq. Meguro. General Plan (岩永邸)
平面／断面／ワットマン紙／鉛筆／彩色／49.3×67.9

Ⅲ-3 岩永邸 明治45年（1912）竣工

岩永邸は、現在の東京都目黒区の2万坪もの広大な敷地に建てられた大邸宅である。施主の岩永省一は、日本郵船株式会社の事務取締役を務めた。

コンドルが設計を手掛けた洋館は、木造平屋、建坪約42坪と小規模であり、離れとしての役割を担った建物であったと考えられる。現在は、目黒雅叙園の宴会場として一部移築されている。

表題などの筆跡は、コンドルのものと一致する。立面図（Ⅲ-3-2）には、「明治四十四年十一月竣工」と書き込まれるが、実際には明治45年（1912）完成とされており、何らかの事情があって図面作成時の計画よりも完成が遅れた可能性がある。



Ⅲ-3-2 Additions to Residence of S. Iwanaga Esq. Meguro. Elevations (岩永邸)
立面（西面、南面）／ワットマン紙／鉛筆／彩色／49.3×67.7

IV 日本文化に見た夢

明治後期から大正初期かけて、コンドルは洗練された作品を数多く残し、邸宅建築家として不動の立場を築きつつありました。そのなかでも、彼は更なる挑戦を見せています。

古河邸では、和室の導入を試みています。初期の作品では、外観や意匠に日本建築の特徴を取り入れることはあっても、和室を設けることはありませんでした。どのような建築が日本で適しているかを考え続けたコンドルの1つの答えがここに見られます。

また、成瀬邸では鉄筋コンクリート造を導入していますが、これは日本の地震の多さを考慮したためだと考えられ、日本の風土、その土地の性格に配慮した末の採用だといえます。

こうした日本の文化・技術の導入は、河鍋暁斎から学んだ日本画や長年の日本文化の研究のあらわれでもあります。日本文化に憧れ、遠くイギリスからやってきたお雇外国人建築家コンドルは、洗練された作品の数々とともに、日本の建築文化のなかに今も生き続けています。

IV-1 古河邸

大正3年（1914）頃設計 大正6年（1917）竣工

東京都北区西ヶ原町に建設された古河鉱業会社社長・古河虎之助の本邸である。虎之助がコンドルに設計を依頼した経緯や時期、工事経過などは不明だが、図面に残される日付から大正3年（1914）には計画が進められていたと考えられる。

本館は、煉瓦造二階建て、建坪約240坪である。外壁に真鶴の新小松石を用い、スコティッシュ・パロニアル様式を試みたと言われている。一階には西洋式の食堂や応接室、ビリヤード部屋を設け、二階に仏間のほか家族が使用するための和室を配置する。家族の生活様式を重視した私生活の空間を確保する工夫が施されている。本館は黒色の石を基調としているため重厚な印象を与えるが、門扉詳細図（IV-1-3）に示されるように、細部は華やかな表現でまとめられている。

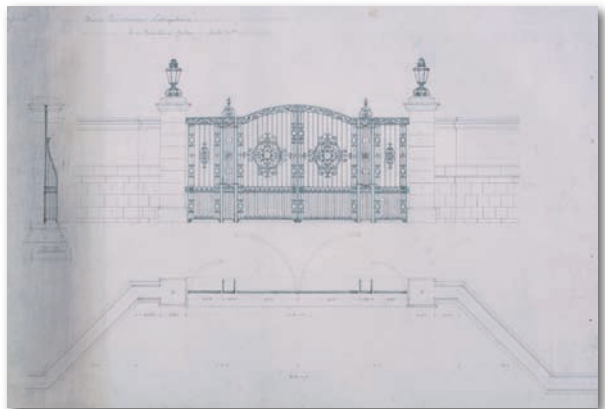
現在は、旧古河庭園として一般公開されており、本館や庭園（西洋庭園、日本庭園）を見ることができる。日本庭園は平安神宮や京都大学所有の清風荘を手がけた七代目小川治兵衛の作である。配置図（IV-1-1）は、鉛筆仕上げだが、庭園の植栽なども描かれており、細やかで丁寧に仕上げられた完成度の高い図面である。



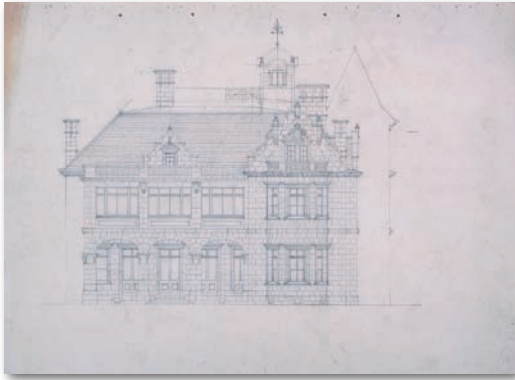
IV-1-1 Residence of T.Furukawa Esq. Prot Plan Sketch (古河邸本館) 配置/ワットマン紙/鉛筆/彩色/85.8×67.6



IV-1-2 古河邸本館設計図 断面（南北）/ワットマン紙/鉛筆/67.5×97.4



IV-1-3 Baron Furukawa.Nishigahara Iron Entrance Gates. (古河邸門扉) 門扉詳細（立面、断面、平面）/ワットマン紙/鉛筆/一部彩色/64.6×90.0

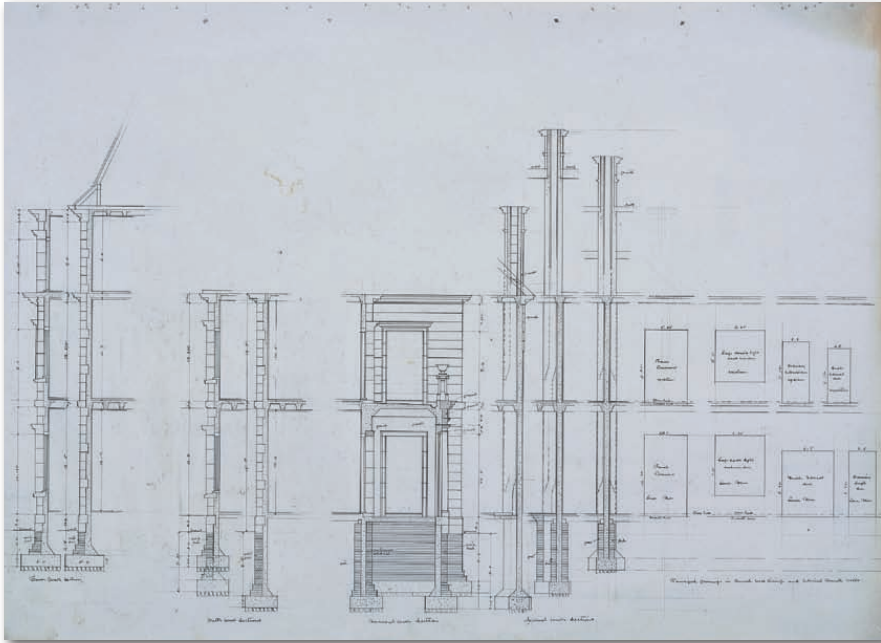


IV-2-1 成瀬邸本館設計図
立面（背面）／ワットマン紙／鉛筆／49.5×67.8

IV-2 成瀬邸 大正8年（1919）竣工

成瀬邸は、現在の港区南麻布に建設された和館と洋館からなる成瀬正行の邸宅である。成瀬正行は、盛興商会を興した人物である。洋館の外壁は御影石の切石積みで、重厚かつ華麗なデザインをもつコンドル晩年の代表作のひとつである。第二次世界大戦で内部が焼失し、その後取り壊された。

洋館は鉄筋コンクリート造二階建て（塔屋部は三階）である。コンドルは、本邸において初めて鉄筋コンクリート造を用いた。日本では関東大震災の被害の大きさから住宅にも鉄筋コンクリート造が積極的に導入されるようになったが、コンドルはその先駆けであったといえよう。



IV-2-2 成瀬邸本館設計図
矩計（外壁、間仕切壁）／開口部展開／ワットマン紙／墨入／49.6×67.8

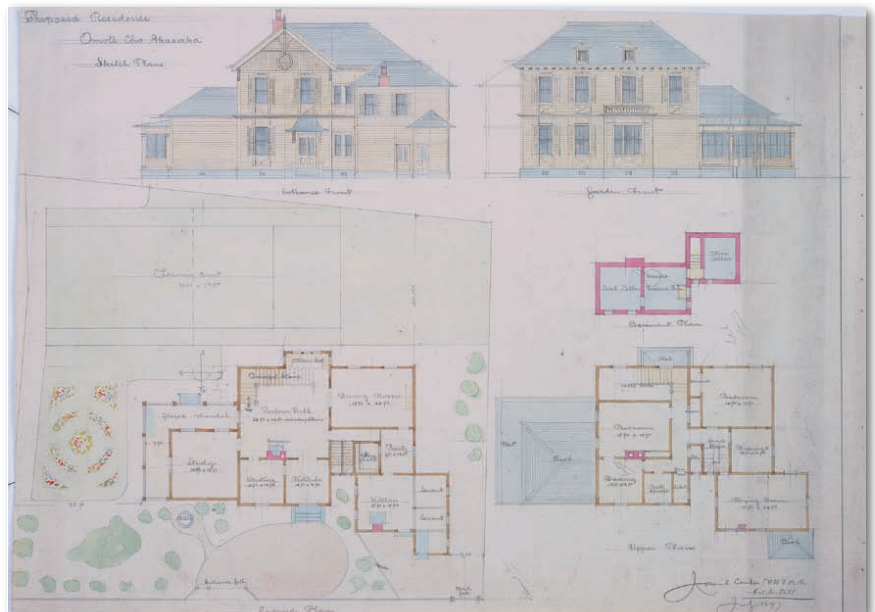
V コンドル建築図面の美

V-1 赤坂表町住宅

明治30年（1897）設計

赤坂表町住宅は、1枚の基本計画図面（立面・平面図（V-1-1））だけがその姿を今に伝える。依頼主は明らかとなっておらず、実施されたかどうか不明である。

淡い彩色がなされ、部屋のおおまかな寸法が書き込まれている。建物の雰囲気と大きさのイメージを施主に伝えるための図面なのだろう。表題、室名、単位などの書き込みの筆跡はコンドル自身のものであり、彼の図面の引き方やタッチを知ることができる貴重な図面である。



V-1-1 Proposed Residence Omote Cho Akasaka Sketch Plans（赤坂表町住宅）
立面（北面、南面）／平面（1、2、地階）／ワットマン紙／鉛筆／彩色／47.5×68.8

V-2 赤星家大磯別邸

明治40年（1907）竣工

神奈川県大磯町に建てられた赤星家の別荘である。赤星家は、明治維新後に海軍への物資調達で財を成したといわれている。関東大震災により倒壊した。

洋館は、コンドルの邸宅作品としては小規模（建坪約70坪）であり、渡り廊下で和館と接続される。一階を煉瓦造石積み、二階をハーフトィンバーとする。半円形に突出した階段室やハーフトィンバーの壁が軽やかな印象を持たせる。

図面は、水彩で仕上げられている。計算式などの書き込みがなく、右下に自署があることから、完成案にちかいものだと考えられる。



V-2-1 Proposed Country Villa（赤星家大磯別邸）

立面（正面）／ワットマン紙／鉛筆／彩色／48.6×64.4

V-3 岩崎家箱根湯本別邸

明治42年（1909）竣工

三菱財閥の二代目総帥であり男爵であった岩崎彌之助が晩年に建設したのが、岩崎家箱根湯本別邸である。彌之助が明治35年（1902）の欧州旅行の際に立ち寄ったスイスの風景に感動し、建設を思い立ったといわれている。

煉瓦造二階建て、外壁には野面石積み、妻壁にはハーフトィンバーを用いる。素朴でありながら優雅な姿は、スイスの雄大な自然を想起させるようである。

図面は、水彩で仕上げられており、淡い木々の色が爽やかな周りの自然を違和感なく表現している。コンドルの水彩仕上げによる図面の代表作といえる。



V-3-1 岩崎家箱根湯本別邸設計図

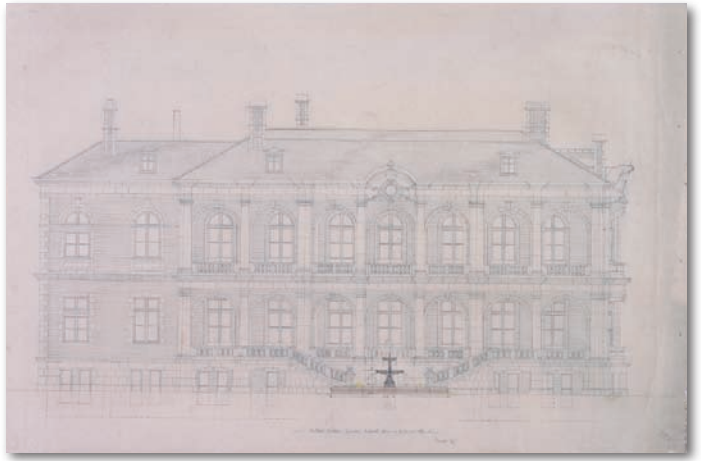
透視図／ワットマン紙／鉛筆／彩色／31.3×42.0

V-4 三井家倶楽部 大正2年(1913)竣工

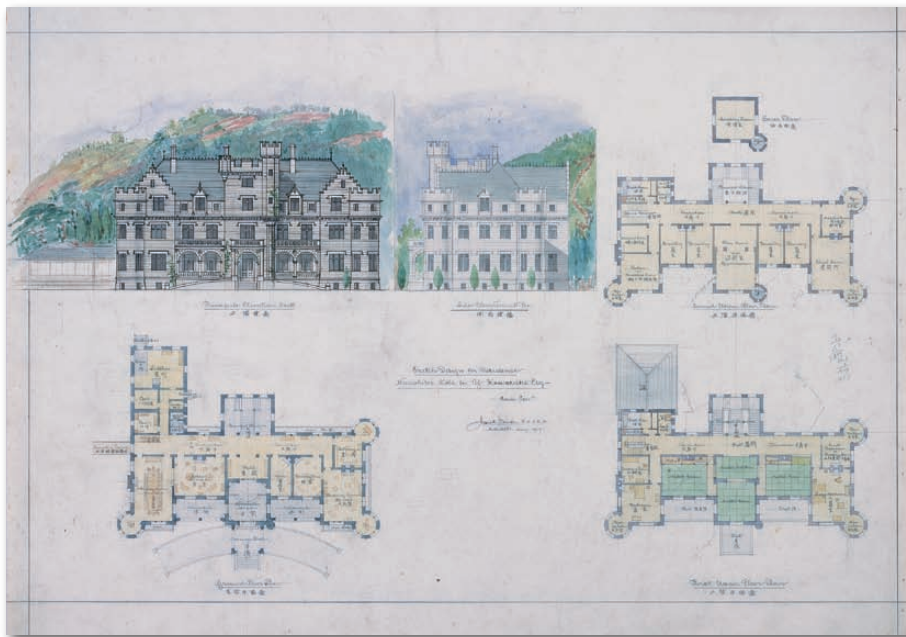
東京・三田に建設された財閥三井家の貴賓接待所である。コンドルに依頼された経緯や時期ははっきりとしないが、三井財閥の実力者であった益田孝を通して依頼された可能性が高いと思われる。

本館は、煉瓦造地下一階地上二階建て、外壁を白色タイル・隅石積で仕上げた建物である。内部には、中央部に張出した二層のベランダやステンドグラスが施されたホールなどが配置される。ルネサンス風の意匠を用いた華麗な建物であり、コンドルの晩年の代表作といえる。

図面は、鉛筆、一部彩色で仕上げられている。噴水も描かれており、建物の周囲の景観にまで配慮したコンドルの設計姿勢がうかがえる。



V-4-1 三井家倶楽部本館設計図
立面(背面)／噴水立面／ワットマン紙／鉛筆／一部彩色／58.9×89.7



V-5-1 Sketch Design for Residence Nunobiki Kobe for Y.Kawasaki Esq. (川崎邸)
立面(正面、側面)／平面(1、2、3階、塔屋)／ワットマン紙／鉛筆／一部墨入／彩色／48.8×64.3

V-5 川崎邸

大正6年(1917)設計

神戸の布引山下にあった川崎造船副社長・川崎芳太郎の本邸である。当初は、和館・洋館の建設が計画され、洋館の設計をコンドルに依頼された。洋館は、建坪約350坪、石造り二階建ての大邸宅の予定であった。しかし、和館を建設中であった大正9年(1920)に芳太郎が死去したため、洋館は建設されなかった。

実施されなかったとはいえ、コンドルの数多くの邸宅建築のなかでも、特に力強く、目をひく作品である。

図面には彩色が施され、書き込みに日本語訳が付けられている。数式や床材などの書き込みがあり、設計過程をうかがうことができる。

V-6 北下浦別邸

大正6年(1917)設計

1枚の基本設計図面だけがその姿を伝える。北下浦別邸に関する情報は少なく、図面の日付から、大正6年(1917)4月には設計に取りかかっていたこと、三浦半島の北下浦村に建設予定であったことがわかるのみである。コンドルに依頼された経緯や依頼主も不明であり、実際には建設されなかった可能性が高い。

装飾が少なく、近代的で華麗な邸宅である。

図面は、水彩で仕上げられている。計算式や文字が書き込まれ、右下にはコンドルの自署も記されている。

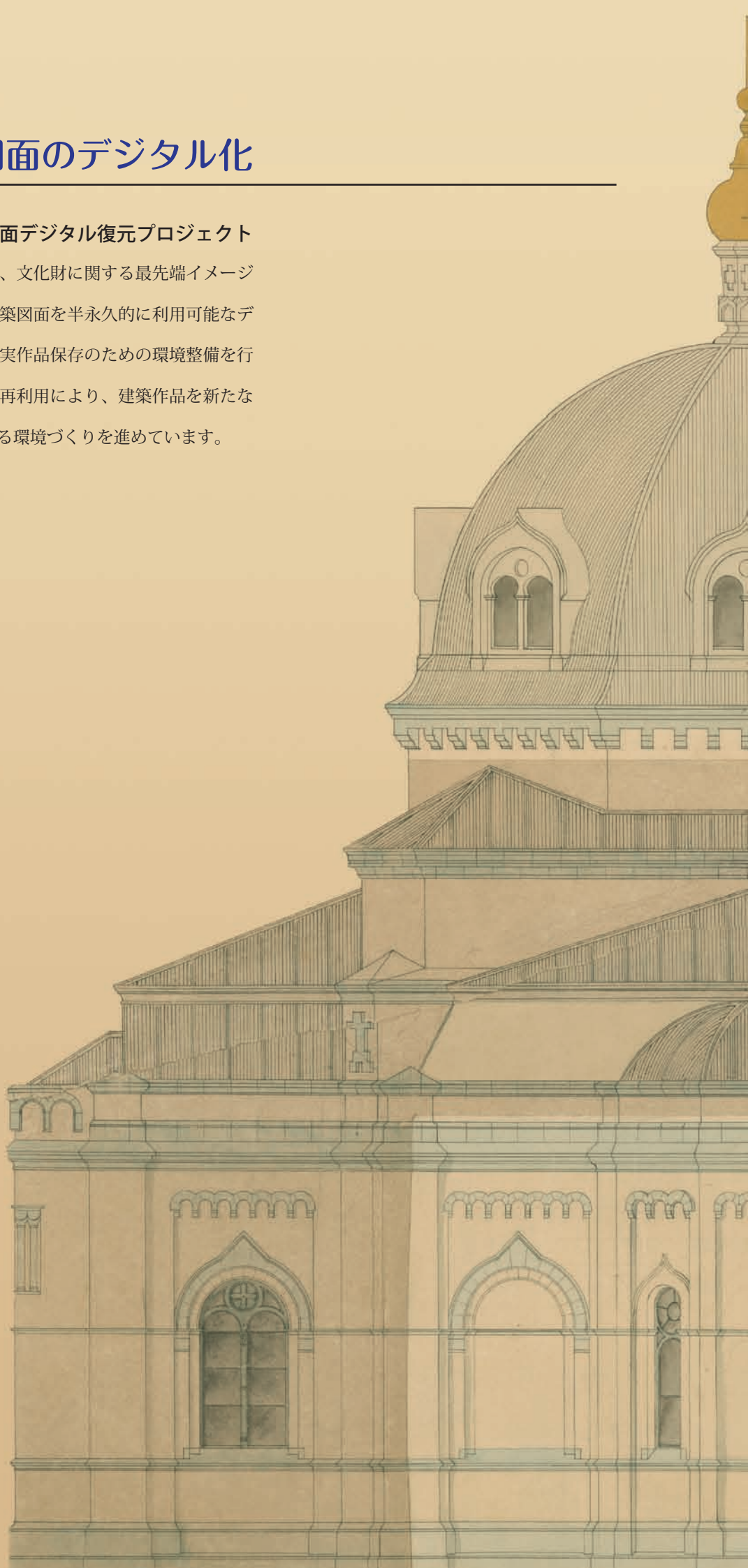


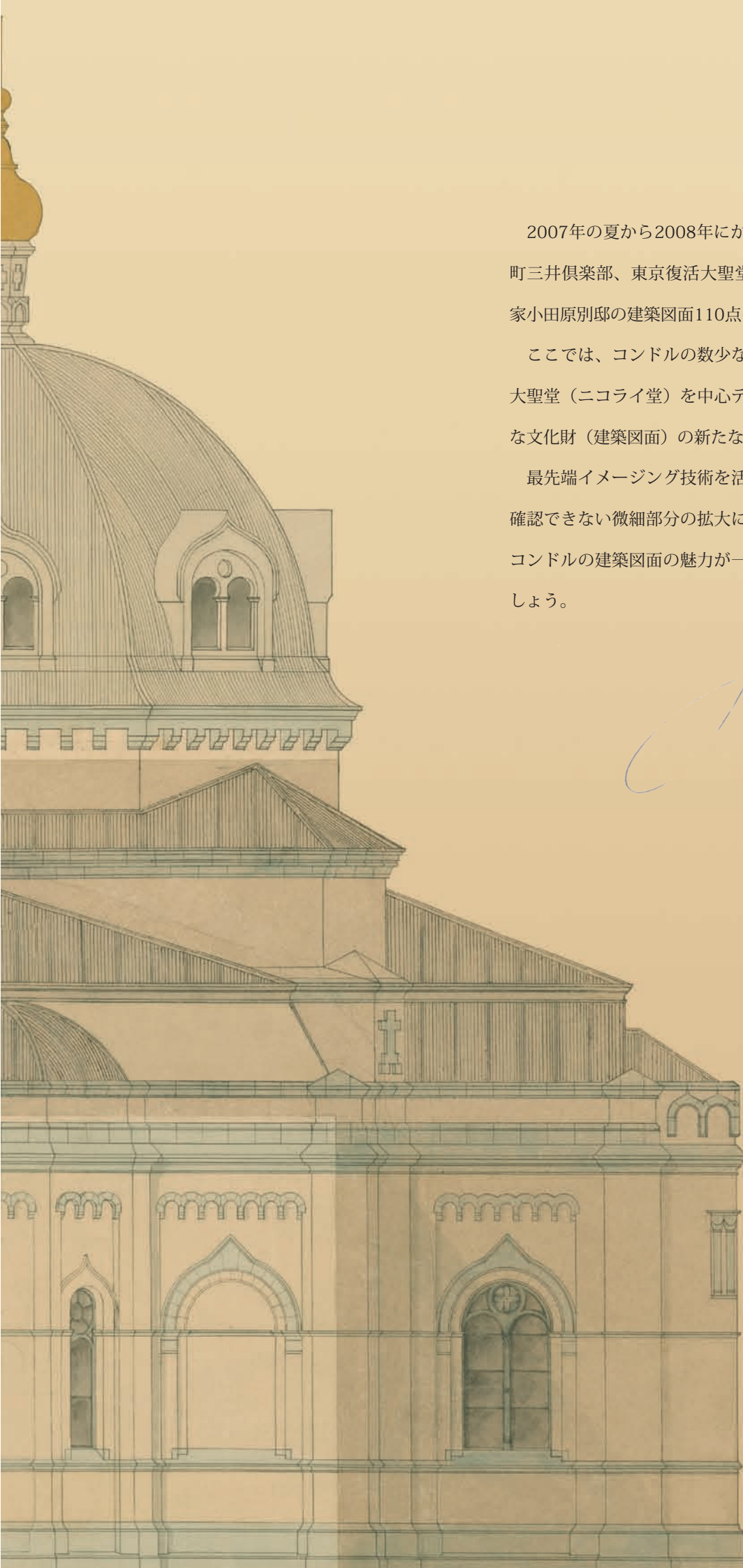
V-6-1 Design for Small Country Villa at Kita Shitaura Sketch Plans (北下浦別邸)
立面(南西面、南東面、北東面)／平面(1、2階)／ワットマン紙／鉛筆／彩色／49.0×68.8

コンドル建築図面のデジタル化

ジョサイア・コンドル建築図面デジタル復元プロジェクト

京都大学大学院工学研究科では、文化財に関する最先端イメージング技術を活用し、コンドルの建築図面を半永久的に利用可能なデジタル画像として記録・保存し、実作品保存のための環境整備を行うとともに、そのデジタル画像の再利用により、建築作品を新たな研究資料や教育教材として提供する環境づくりを進めています。





2007年の夏から2008年にかけて、コンドルの代表作である綱町三井倶楽部、東京復活大聖堂（ニコライ堂）、芝唯一館、山縣家小田原別邸の建築図面110点のデジタル化を行いました。

ここでは、コンドルの数少ない現存作品の一つである東京復活大聖堂（ニコライ堂）を中心テーマに、劣化し失われていく貴重な文化財（建築図面）の新たな活用の可能性を紹介します。

最先端イメージング技術を活用したデジタル復元や、目視では確認できない微細部分の拡大により、豊かなデザイン性を備えたコンドルの建築図面の魅力が一層輝きを増して見えてくることでしょう。

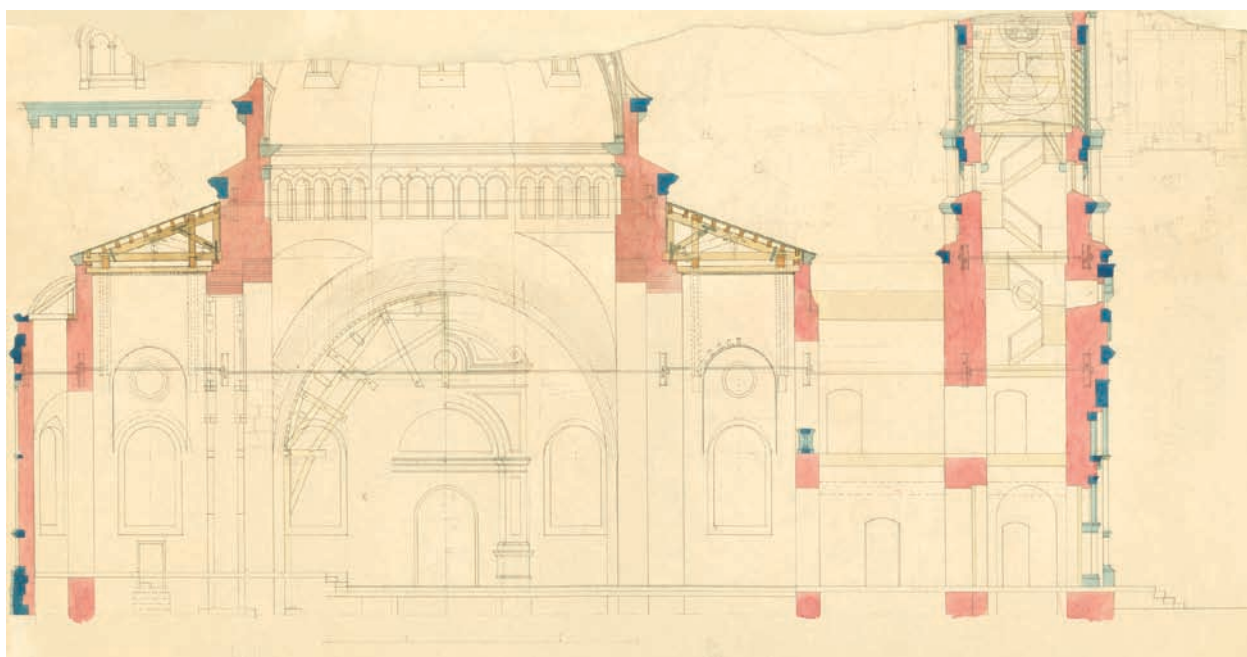
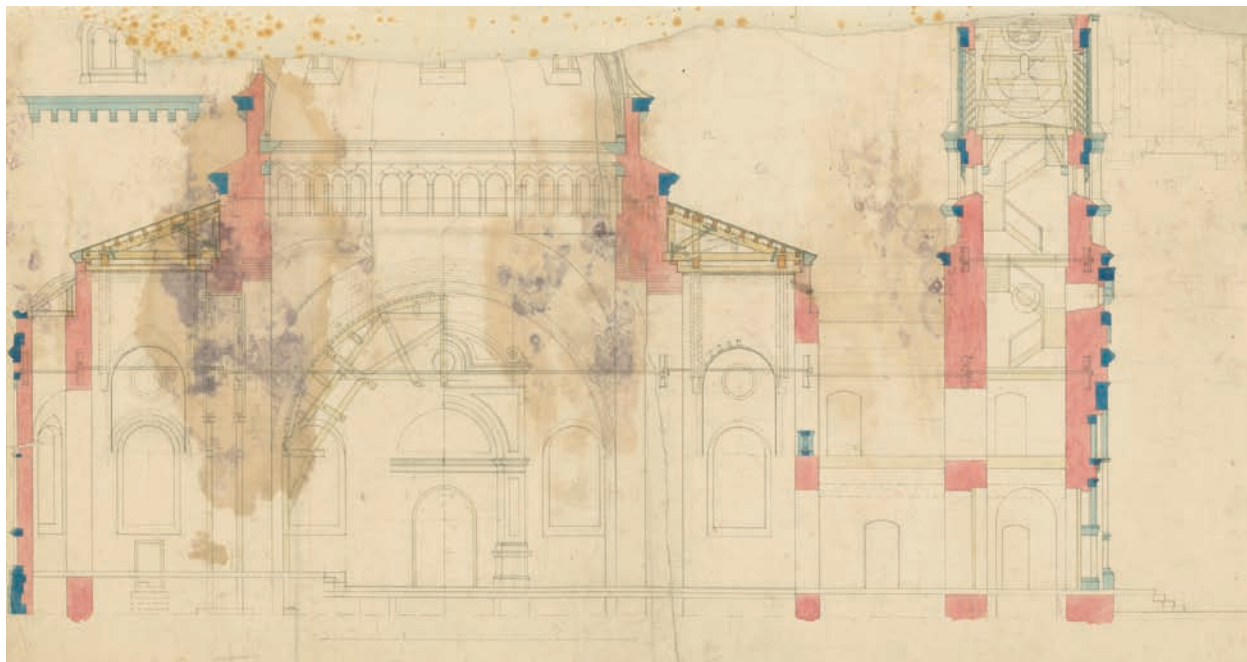
Jonah Corder

東京復活大聖堂（ニコライ堂）聖堂東立面図
ワットマン紙／墨入／彩色／縮尺50分の1
70.2×72.0

I デジタル修復

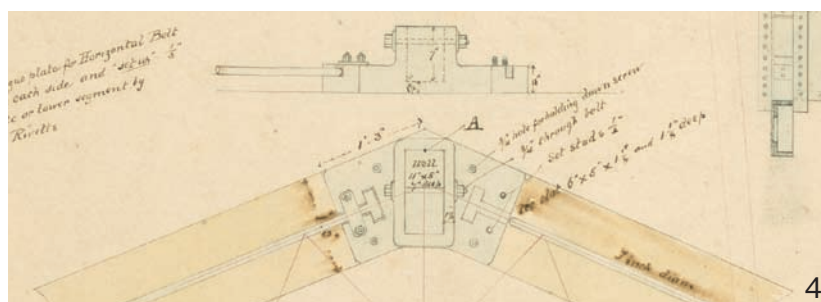
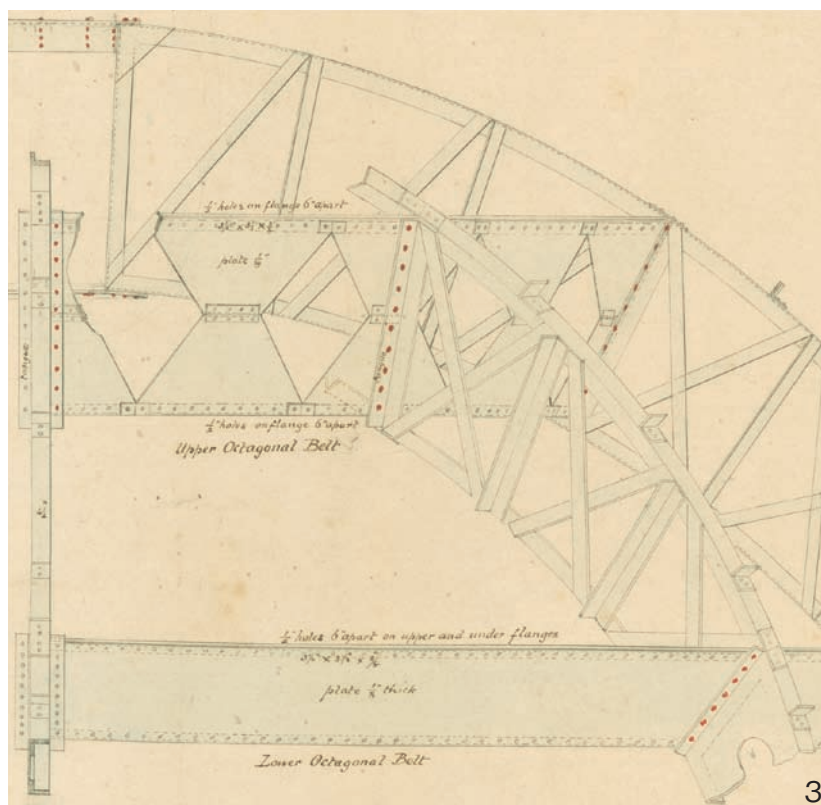
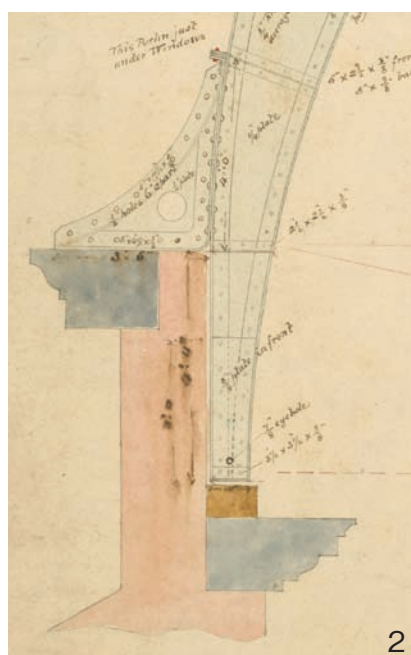
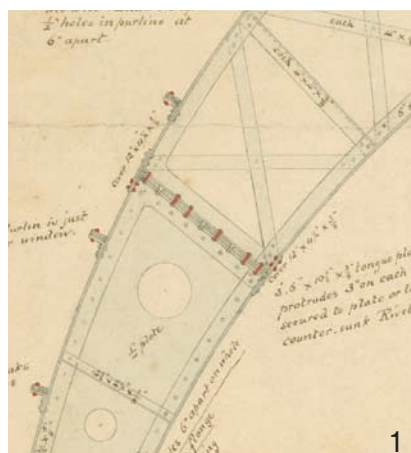
コンドルが手がけた数々の歴史的建造物の建築図面は、彼の制作活動の実態を知る貴重な手がかりとなるだけでなく、当時の建築界、ひいては社会全体の様相を知るための重要な資料となる。しかし、建築図面は美術作品と異なり、実際に建築の現場で使用され、さらには教材として活用されていたという性格上、傷みや汚れなどによる劣化が進んでいる。

実作品を半永久的に利用可能なデジタル画像として記録・保存し、後世に伝えていくだけでなく、実作品の元になった図面を新たな研究資料や教材として活用することを目的に、高精細デジタルデータを用いて、コンドルの建築図面のデジタル修復が進められている。



東京復活大聖堂（ニコライ堂）聖堂断面図
ワットマン紙／墨入／一部鉛筆／彩色／縮尺50分の1／48.5×98.5
上) デジタル修復前 下) デジタル修復後

II クローズアップ

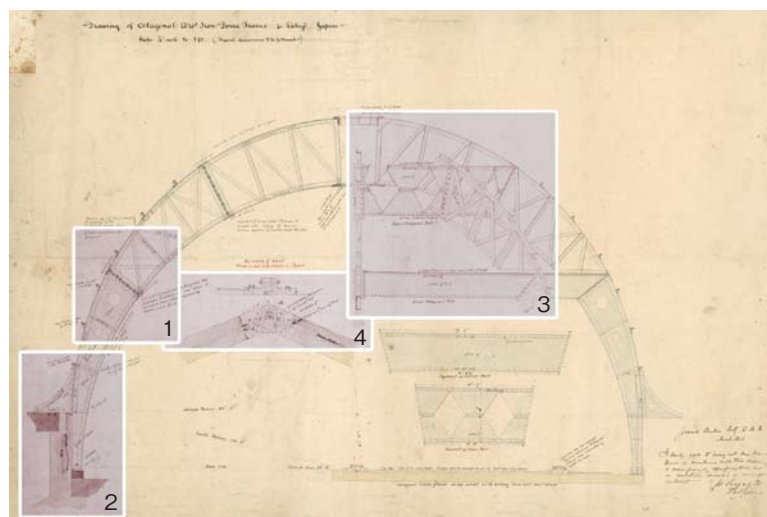


東京復活大聖堂（ニコライ堂）鉄骨小屋組詳細図（ドーム部分）

ワットマン紙／墨入／彩色／縮尺24分の1／56.7×87.9

1・左上）鉄骨トラス中間部接続詳細図 3・右上）鉄骨トラス頂部取り合い詳細図

2・左下）鉄骨トラス足元廻り断面詳細図 4・右下）鉄骨トラス足元廻り平面詳細図

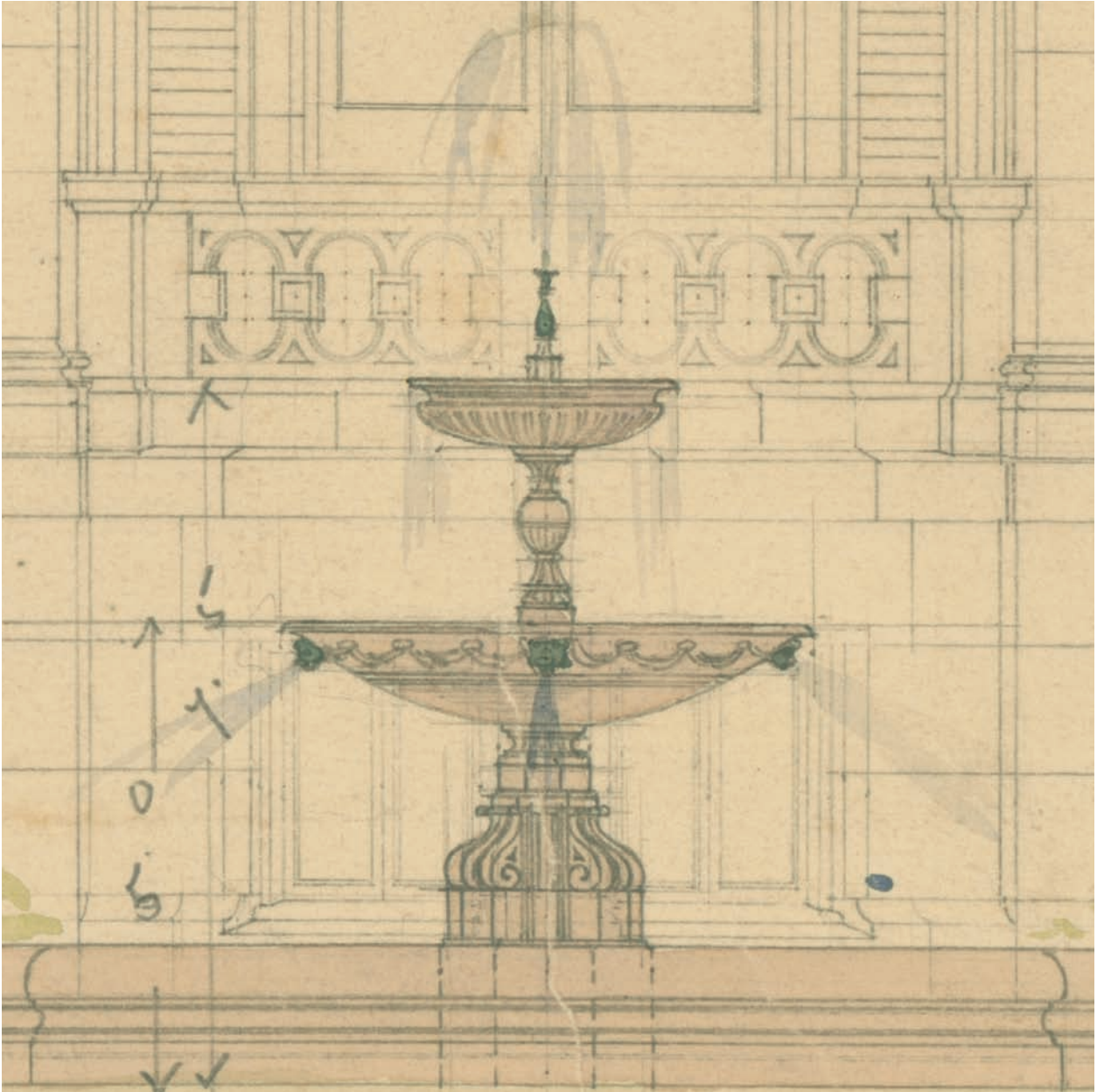


現存する建物のドーム部分は、1962年に重要文化財指定を受けているものの、1923年9月1日の関東大震災により損壊、その後の復興工事により1929年に完成したものである。今もなお残る建築図面は、損壊前の建築を示す貴重な資料であり、コンドル自筆のサインも含めて本人の美しい筆跡をそのまま伝える文化財として高く評価されている。

デジタル拡大図では、目視では確認できない精緻な図や美しい文字、数字の書き込みをはっきりと読み取ることができる。

Ⅲ コンドルのデザインの世界

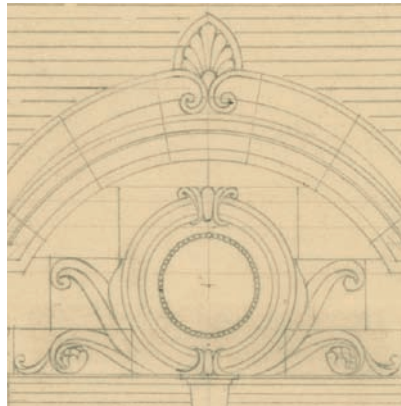
建築家ジョサイア・コンドルは、日本画家・河鍋暁斎^{かわなべきょうさい}の弟子として日本画の技法を習得し、日本文化を深く愛していたと言われている。明治の町と調和のとれたコンドル建築の装飾の数々からは、彼の東方趣味から育まれた独自で繊細かつ優美なデザインを見ることができる。



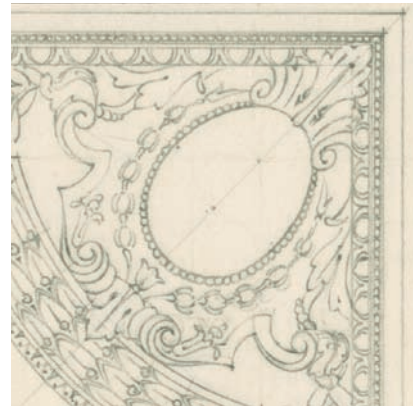
噴水姿図
三井家倶楽部本館 噴水立面図より引用
切抜サイズ7.0×7.0



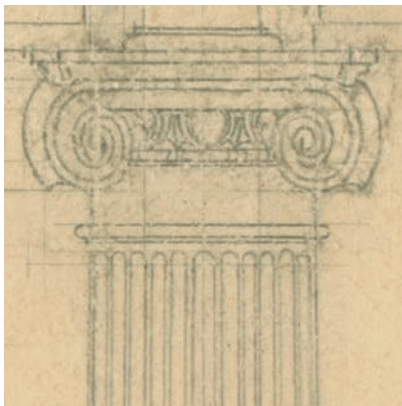
左上) 天井レリーフ詳細図
1階小客室天井見上図、縁形詳細図より引用
切抜サイズ3.0×3.0



中上) 正面ファサード部分詳細図
立面図より引用
切抜サイズ5.8×5.8



右上) 天井レリーフ詳細図（コーナー部分）
1階大客室天井見上図、縁形詳細図より引用
切抜サイズ4.7×4.7



左中) 1階柱頭姿図
1、2階ホール、階段室室内展開図（南面）より引用
切抜サイズ3.0×3.0



中中) 天井レリーフ詳細図
1階小客室天井見上図、縁形詳細図より引用
切抜サイズ1.6×1.6



右中) マントルピース中央レリーフ詳細図
1階大客室室内展開図（北面）より引用
切抜サイズ2.0×2.0



左下) 門扉装飾詳細図（中央）
正門及び裏門立面詳細図より引用
切抜サイズ6.0×6.0



中下) 階段踊場段裏装飾詳細図
1、2階ホール、階段室室内展開図（西面）より引用
切抜サイズ1.3×1.3



右下) 門柱頂部ランプ詳細図
正門及び裏門立面詳細図より引用
切抜サイズ6.0×6.0

（いずれも三井家倶楽部本館 建築図面）

Josiah Conder 略歴

建築 / 著作・論文

* 建築作品は竣工 / 計画年、出展作品は太字で表記

9月28日ーロンドンで生まれる	1852（嘉永5）	
ペドフォード商業学校に入学	1865（慶応1・13歳）	
トーマス・ロジャー・スミスの建築事務所で修業する かたわらサウス・ケンシントン美術学校とロンドン大学で建築学を学ぶ	1869（明治2・17歳）	
ウィリアム・バージェスに師事	1873（明治6・21歳）	
ソーン賞受賞、日本政府と契約	1876（明治9・24歳）	ソーン賞競技設計案
来日、工部大学校造家学科教授、工部省営繕局顧問	1877（明治10・25歳）	
工部大学校第一期生辰野・片山・曾禰・佐立が卒業	1879（明治12・27歳）	訓盲院、"Theatres in Japan"発表
	1880（明治13・28歳）	"The history of Japanese costume - Court dress"発表
皇居造営顧問技師、河鍋暁斎の弟子となる	1881（明治14・29歳）	上野博物館、"The history of Japanese costume - Armour"発表
契約延長、工部省営繕局雇となり工部大学校教授を兼任	1882（明治15・30歳）	山里謁見所計画案
暁斎から「暁英」の号を受ける	1883（明治16・31歳）	鹿鳴館
第二回内国絵画共進会で「雨中鷺」など入選、勲4等旭日小綬賞を受ける 王立建築家協会正会員として認可される	1884（明治17・32歳）	有栖川邸、東京大学法文科校舎、北白川宮邸
	1885（明治18・33歳）	中央諸官庁配置計画案
臨時建築局雇、帝国大学工科大学建築学科講師となる 学生17人を引率してドイツへ出張、ロンドンへ帰省	1886（明治19・34歳）	"The art of landscape gardening in Japan"発表 "Further note on Japanese architecture"発表、 『 造家必携 』出版
ロンドンから帰国	1887（明治20・35歳）	外務次官官舎、外務大臣秘書官官舎、"Domestic architecture in Japan"発表
講師辞任、事務所を西紺屋町に設置、暁斎死去	1888（明治21・36歳）	飯倉教会堂増築計画、香蘭女学校校舎
	1889（明治22・37歳）	カークウッド邸、岩崎家深川邸、砲兵工廠本館、内閣庁舎、"The theory of Japanese flower arrangements"発表
臨時建築局廃局となり官界を去る、三菱社の顧問となる	1890（明治23・38歳）	横浜築港事務所
	1891（明治24・39歳）	ニコライ堂、"The flowers of Japan and the art of floral arrangement"出版

Josiah Conder 略歴

建築 / 著作・論文

※建築作品は竣工 / 計画年、出版作品は太字で表記

東京帝国大学名誉教授	1892（明治25・40歳）	岩崎家駿河台邸、海軍大臣官舎、「各種建築ニ関シ 近来ノ地震ノ結果」発表
前波くめと正式に結婚（長女ハルを養子として入籍）	1893（明治26・41歳）	荘田邸 "Landscape gardening in Japan", "Supplement to Landscape gardening in Japan"出版
勲3等瑞宝章を受ける	1894（明治27・42歳）	基督教青年会館、唯一館 、海軍省庁舎、三菱一号館
東京演劇音楽協会に参加、第一回演劇公演に参加	1896（明治29・44歳）	日光英国公使館別荘、岩崎家茅町邸、 "Japanese flower arrangement"発表
	1897（明治30・45歳）	独逸大使館 、長崎ホテル、 赤坂表町住宅案
	1899（明治32・47歳）	立教女学院校舎、オーストリア・ハンガリー公使館、 "The floral art of Japan"出版
長女ハルをつれて一時帰国、工学会名誉会員となる	1901（明治34・49歳）	横浜ユナイテッド・クラブ、高田家青山邸
三河台町に自邸完成、西紺屋町より転居	1904（明治37・52歳）	コンドル自邸
長女ハルがウィリアム・レナルド・グリッドと結婚	1906（明治39・54歳）	鎌倉海浜ホテル案 、益田邸、渡辺家鎌倉別荘
	1907（明治40・55歳）	赤星家大磯別邸 、未延邸
	1908（明治41・56歳）	岩崎家高輪別邸
	1909（明治42・57歳）	寺島邸、 岩崎家箱根湯本別邸 、小笠原教会、近藤邸
	1911（明治44・59歳）	アーウィン邸、加藤邸、 "Paintings and studies by Kawanabé Kyōsai"出版
	1912（明治45・60歳）	岩永邸 、園田邸、赤星家赤坂邸、東京倶楽部
	1913（大正2・61歳）	諸戸邸、今村邸、岩崎家元箱根別邸、 三井家倶楽部
工学博士の学位授与	1914（大正3・62歳）	
	1916（大正5・64歳）	岩崎家、 島津家
	1917（大正6・65歳）	北下浦別邸案 、 川崎邸案 、 古河邸
	1918（大正7・66歳）	山縣家小田原別邸
	1919（大正8・67歳）	成瀬邸
日本建築学会から表彰を受ける、6月10日ーくめ夫人逝去、6月21日ー脳硬化症により逝去,67歳	1920（大正9）	
		コンドル没後：『 コンドル博士遺作集 』（1931）

【参考文献】

- ・牛丸康夫『日本正教史』，宗教法人 日本ハリストス正教会教団 府主教庁，1993年
- ・岡本哲志監修『一丁倫敦と丸の内スタイル：三菱一号館からはじまる丸の内の歴史と文化』，三菱地所，2009年
- ・河東義之編『ジョサイア・コンドル建築図面集』1～3，中央公論美術出版，1980年
- ・桑名市博物館編『コンドルとその周辺展』，桑名市博物館，1993年
- ・鈴木博之・藤森照信監修『鹿鳴館の夢：建築家コンドルと絵師暁英』，INAX，1991年
- ・河鍋楠美[ほか]編『鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展』，財団法人 東日本鉄道文化財団，1997年
- ・東京復活大聖堂修復成聖記念誌刊行委員会編『東京復活大聖堂修復記念誌』，
宗教法人 日本ハリストス正教会教団 東京復活大聖堂教会，1998年
- ・パウエル及川信『日本正教会の歴史1 日本の光照者 亜使徒 聖ニコライの歩み』，
日本ハリストス正教会教団 西日本主教教区 宗務局，2008年
- ・畠山けんじ『鹿鳴館を創った男 お雇い建築家ジョサイア・コンドルの生涯』，河出書房新社，1998年
- ・藤森照信『日本の近代建築 上（幕末・明治篇）』，岩波書店，1993年
- ・藤森照信「丸の内をつくった建築家たち—むかし・いま」，『別冊新建築 三菱地所』，新建築社，1992年

■実行委員会

京都大学図書館機構長	藤井 譲治
工学研究科建築学専攻 教授	高橋 康夫
工学研究科建築学専攻 助教	岸 泰子
工学研究科建築学専攻 研修員	登谷 伸宏
工学研究科機械理工学専攻 教授	井手 亜里
総合博物館 教授	岩崎奈緒子
附属図書館 事務部長	川瀬 正幸
(事務担当)	
附属図書館 総務課長	木下 聡
附属図書館総務課 図書館専門員	中村 節子
附属図書館総務課 図書館専門員	磯谷 峰夫
附属図書館情報管理課 専門職員	那須 一夫
附属図書館情報サービス課 特殊資料掛長	吉田 弘子
工学研究科総務課 図書掛員（建築系図書室）	杉本 裕美

図録

■監修

京都大学図書館機構長	藤井 譲治
------------	-------

■編集

京都大学工学研究科建築学専攻 教授	高橋 康夫
工学研究科建築学専攻 助教	岸 泰子
工学研究科建築学専攻 研修員	登谷 伸宏
工学研究科機械理工学専攻 教授	井手 亜里
附属図書館総務課 図書館専門員	中村 節子

■執筆

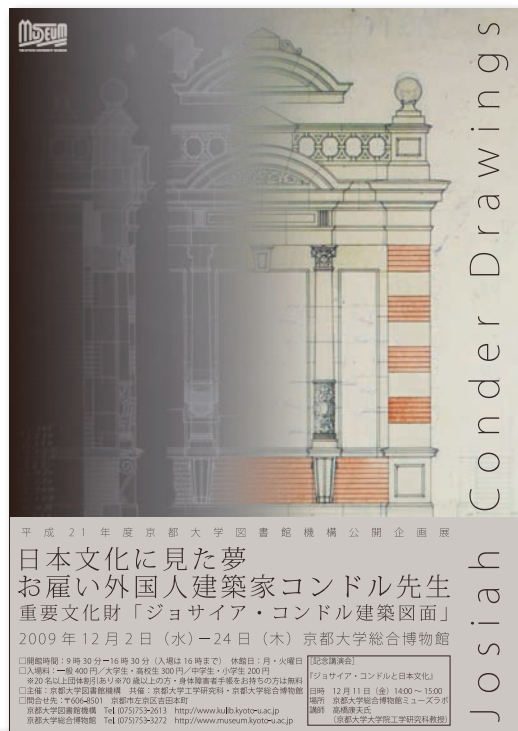
京都大学工学研究科機械理工学専攻 研究員	星合 千津
工学研究科建築学専攻 修士1回生	高田 展充
工学部建築学科 4回生	近藤 佑子

■協力

京都大学工学研究科機械理工学専攻 受託研究員	小西麻衣子
工学研究科機械理工学専攻 受託研究員	杉 志努布
工学研究科機械理工学専攻 受託研究員	村上 泰佑

■表紙デザイン

京都大学工学研究科建築学専攻 助教	朽木 順綱
-------------------	-------



日本文化に見た夢 お雇い外国人建築家コンドル先生 重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」

発行日：2009年12月1日

編集・発行：京都大学図書館機構

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

Tel.(075)753-2613 <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp>

